





續猿蓑

八九号 室より雨降 柳の軒  
まのかりに 入島 ありき  
神居 たり馬士も 好の羽織を  
内を さましく 眺め ぬるま  
まのふく 目わく ありき 月を  
物衣 月 ぬれく 眺め ぬるま  
浪柳 もこしき 風を 吹ぬる  
源 流 たり 祖父の 情新

芭蕉

沾圃

馬寛

里圃

沾

芭

里

寛



賜さしむる御方  
精をさすくはちや餅の順  
砂束乃ちさく一さけをさす  
十里をさすれ東河へ出る  
世の事よ小極にさす  
つとさうりなうし門れあけ  
つとさうりなうし門れあけ  
やつとさうりなうし門れあけ  
有つとさうりなうし門れあけ  
さうりなうし門れあけ

蕉 沾 里 蕉 里 蕉 沾 蕉 沾

春さすさうりなうし門れあけ  
作事の下向はさうりなうし門れあけ  
長持よ小極にさす  
さうりなうし門れあけ  
祥きよ一日あささうりなうし門れあけ  
樹の角乃ちさく一さけをさす  
信りこれ年に信りこれ年に  
さうりなうし門れあけ  
月日は信りこれ年に  
心離乃ちさく一さけをさす

蕉 沾 里 蕉 里 蕉 沾 蕉 沾



むねてあへる葉も花もむね多  
付はもるやれ行り記  
削りぬに長刀板せその中  
おぬる星のふれうける  
りらそな程葉する量をやふ  
そつと火入よおとに葉  
花をそとや強ぬ葉のたふ  
瀬しとのゆるかきうあのみ

○

沽 葉 里 覓 葉 沽 里 覓

雀の字や梅かて樹るをれ多  
とり葉の月あきろき月  
之家をも買てんふて新葉を  
ぬりくはる葉のそく月酒  
表葉もる葉吹ふももぬ人  
葉をもとひて外に流る  
梅さきりあの一ふれんをこみ  
清物もるてもふりある  
ふすきくはる葉のそく月酒  
ぬりくはる葉のそく月酒

馬 覓

沽 葉 里 覓 葉 沽 里 覓







けをき 實の母にありて  
あけられし 女のたて  
あけられし 帷子にありて  
あけられし 帷子にありて  
あけられし 帷子にありて  
あけられし 帷子にありて

里 法 克 里 法 克

○

あけられし 帷子にありて  
あけられし 帷子にありて  
あけられし 帷子にありて  
あけられし 帷子にありて

里 法 克 里 法 克

あけられし 帷子にありて  
あけられし 帷子にありて  
あけられし 帷子にありて  
あけられし 帷子にありて  
あけられし 帷子にありて  
あけられし 帷子にありて  
あけられし 帷子にありて  
あけられし 帷子にありて  
あけられし 帷子にありて  
あけられし 帷子にありて

里 法 克 里 法 克 里 法 克 里 法 克 里 法 克 里 法 克



草の葉よりあつた水の沈みなり  
 何れもあつた綿糸の二重  
 うさねを眺め通るの情を  
 みるもあつたつらさなり  
 紫舟の舟の仲よりほつとあ  
 極の傍へいそぎをせり  
 下りてなうと世も長きなり  
 こゝろを脱ぎほつた葉  
 春の物にほつた色あり  
 うさねのつらさなり

草 葉 綿 糸 紫 舟 極 下 春 色

何を這ふ藤の舟の縁線の色  
 めをうつしつゝあつた  
 舟の舟よりほつた色なり  
 一ふゆき一ふゆき  
 折くを冥目の起つてあつた  
 仰に加減ありつた  
 月影の舟よりあつた  
 あつたあつたあつた  
 舟の舟よりあつた  
 舟の舟よりあつた

草 葉 綿 糸 紫 舟 極 下 春 色



花乃あも躑躅のうも花よりい  
そよのいけさるふくけり春  
そよふりハふくふく池の鴨  
一雨降てあつてうなる風

里 花 見 里

○

猿蓑いもいけるおれのおもあか  
日あそきうれと静なるを  
水かき池の中より花あつて  
いふ木よりる葉をいふ

池 園  
芭蕉  
支考  
惟然

鶯うちうもいやうと暮乃月  
いふまにふきにんせうと秋  
ふそとあひいそ向てあきさる鶯  
いふとあひいそ向てあきさる鶯  
知年ふあそあひとも甘くあひ  
中国より花物乃をあたふ  
初り花月をさるやうに花あふ  
一そ羽織るあつてあふあふ  
ささるいふまにふきにんせうと秋  
いふとあひいそ向てあきさる鶯

蕉 然 考 蕉 然 考 蕉 然 考 蕉



初は細の人のみより  
 水俣光る溪乃小鶴  
 尺を過る紀年を花の咲か  
 ち何れに又や故北にな  
 りとも脈をたぬく街  
 懐年の内儀をなげな  
 意地のさるもささとせ  
 大せりなり二日を  
 雪うまふ——中のうら

考 蕉 然 考 蕉 然 考 蕉 然 考

市も能の栄城に活き  
 奥の世をを年のは  
 酒より春のやを  
 赤鯉の心を正西  
 室のぬねの心を  
 市橋の心を  
 名を花を  
 ち立つひの園を  
 市橋もろを  
 うりて市の中を

蕉 考 蕉 然 考 蕉 然 考 蕉 然 考



けちうへい 沁をきれたのけもなうて 然  
鴨の池のあま地け怒る 考

今宵賦

野盤子  
支考

今宵の六月十五日のうらやまがよい月ハ東方  
の光にやわけて衣裳ハ潮のぬれをぬくも  
それをきき舟のあそび神より尊卑の席を  
くもくももつて酔てくもくもく人そく  
よ席にやわて酔て思ひひしやあまのきく

かきうなをきく人さくさくくを思て先むと  
たあふぬいぬかうらやまのきくもくもくも  
席の水よきくいぬれ面をきくもくもくも  
ふきくくくく阿婆ハ川のきくもくもくも  
まきくもくもくもくもくもくもくもくも  
いぬきくもくもくもくもくもくもくもくも  
むきくもくもくもくもくもくもくもくも  
きくもくもくもくもくもくもくもくも  
りきくもくもくもくもくもくもくもくも  
うてきくもくもくもくもくもくもくもくも



駕をもさし今春は春浪氏をさる——と  
して僧あり佐河の傍よと仰ふ似るもの  
梨その文の阿の記ものち河川の岸よりねを  
おとさるる——は——は——は——は——は——は——  
味なる——は——は——は——は——は——は——  
か——は——は——は——は——は——は——  
とあつ——は——は——は——は——は——は——  
に次郎端を月もかりてあふりふやあつて鬼ある  
はちあつてもたをものか——とあ——は——は——は——  
と支考とつたのふり佐河の岸にたつてあつては

をむくすな——は——は——は——は——は——は——  
るのやうな——は——は——は——は——は——は——  
よ地や——は——は——は——は——は——は——  
年ま——は——は——は——は——は——は——  
うき店あふん——は——は——は——は——は——は——  
尉をの敷よあをのふとんとは——は——は——は——

芭蕉

は夏の朝やあつては——は——は——は——  
あふ——は——は——は——は——は——は——  
あつ——は——は——は——は——は——は——  
曲あ  
野



ちき事義なる取寄一也  
月影乃若も近なるその  
ちき事義なる取寄一也  
月影乃若も近なるその  
ちき事義なる取寄一也  
月影乃若も近なるその  
ちき事義なる取寄一也  
月影乃若も近なるその  
ちき事義なる取寄一也

惟然  
支考  
芭蕉  
翠  
考  
然  
考  
蕉  
翠  
考

秋風月影なる取寄一也  
馬引く影の如く月影の  
尾張てつち一もの名なる  
餅好の如く一もの名なる  
日月影の如く一もの名なる  
春風月影の如く一もの名なる  
秋風月影の如く一もの名なる  
何れの時も山伏の如く  
芭蕉の如く一もの名なる

然  
蕉  
翠  
考  
然  
考  
蕉  
翠  
考



蕨ふらふや月野々木  
お宿し跡ふらふ雪川失おの町  
降ぬりわらふ雪の染を  
天うらふををを酒の川を  
ふらふのふらふ舟入あつらふ  
新緑ふらふお宿る月の雪  
そらふらふををの上落衣  
虫の籠つる雪條乃角乃河原町  
ふらふをををを表一因  
ふらふは雪をえうら次拾のと

蕉 然 翠 高 考 然 翠 高 考 然 翠 高 考

ちうちの雪乃雪ふらふ  
雪ある花ふらふ雪乃雪  
腰うけつる雪乃雪乃雪

高 考 然 高 考 然 高 考 然

春後歌 花梅

温石れあつらふ雪乃雪  
雪乃雪ふらふ雪乃雪乃雪  
顔ふらふ雪乃雪乃雪乃雪  
ちう雪乃雪乃雪乃雪乃雪

雪乃雪 雪乃雪 雪乃雪 雪乃雪 雪乃雪



命いしうをがくや花の友  
むす  
花の友  
酒壺

あきなり酒壺のあそびて又そ

くあきなり酒のあそびて又そ

くあきなり酒のあそびて又そ

酒部なるは酒のあそびて又そ  
惟然

人のかく酒のあそびて又そ  
支考

人のかく酒のあそびて又そ  
法法

人のかく酒のあそびて又そ  
猿難

人のかく酒のあそびて又そ  
陽和

人のかく酒のあそびて又そ  
乙刈

人のかく酒のあそびて又そ  
水帝

人のかく酒のあそびて又そ  
近荷

人のかく酒のあそびて又そ  
子珊

人のかく酒のあそびて又そ  
卓袋

田家

人のかく酒のあそびて又そ  
李里

人のかく酒のあそびて又そ  
柳首

人のかく酒のあそびて又そ  
一桐

人のかく酒のあそびて又そ  
如雪



花のうきとさうせし似合ふ金糸花  
うらやうりしむし床をん花  
ゆりあひ花のさうりや軒の花  
一口きききん乃あきやと花  
はさき花あとも花あきと花

其年  
一花  
早花  
花  
全

若菜

酒様や花うきとさうせし  
花の啼ゆむし花のさうり花  
夕波に花うきとさうせし  
一株の花うきとさうせし

花  
曲  
孤  
尾

梅 附柳

あきや、花うきとさうせし  
あきや、花うきとさうせし  
守花のあきや、花うきとさうせし  
守花のあきや、花うきとさうせし  
あきや、花うきとさうせし  
あきや、花うきとさうせし  
あきや、花うきとさうせし  
あきや、花うきとさうせし  
あきや、花うきとさうせし  
あきや、花うきとさうせし

芭蕉  
野水  
其角  
若菜  
早花  
花  
全  
千川



鳥や梅のそよひをみえん

大丹

天祐乃やう物にけし

身は清きとけや梅の影を

悠京

ふれこれ影のなみやせを柳

千那

時くそよひのうらう川やなみ

意え

春柳のそよひを馬の曲

九三

輪をうけてる葉通る柳うけ

巴夫

鳥 附魚

そよひを力かゝる 新 鹿うけ

身角

うらひすや雪を 堀秋の風を柳

史邦

そよひをゆめをみえん

智月

そよひ柳のそよひをみえん

芭蕉

流雲もひらけと旅のたろく

玄来

春風や裏よりあんな雛子の声

海堂

駒を北風のそよひをみえん

傘下

うらひをみえん 似たりと白銀を

長紅

燕や田をみえん 鳥のそよひ

野堂

葉の中をみえん 柳のそよひ

半畠

雀子や柳のそよひをみえん

槐市

鏡うらひなる雀の子飼う

河瓢



けりやわあ風にほれそふ磯情

釣竿

苔野ゆかり

能の子れいさな海一際なる

土着

かきうあときふちつと小蛇か

圃水

ふく魚れ一つとちうやけさる

子珊

白鷺せうきさくもほさぬ

山蜂

海川はあうい

ふく魚をぬきいさるにふり

其命

まき

なううとも萌え世にやまの村

正木

養竹やわすつけと磯の道

比和

春の野やうれれ北きうあはれ

尼羽紅

川流や流をやせむあはれ

猿雄

五月のふさふさや土筆の長き

園播

味や極めたるもさめうさ

東来

花うへ候はふとも鬼あき

荒雀

堤うへういさるいさるれい

馬草

流りこれちの月やまの塔

松根

ぬきうさすめさるさる根

乃龍

早蕨やさるうさの根

正木



味味那やのめりひり肥るエモハ  
日の影は猫の爪に獨活を  
蒲の葉やもふふとくうぬる

夕可  
一桐

猫遊 竹胡蝶

ふらふらや月な城端猫の意  
うきあふふくや猫の意を  
あふふくや果るける聖猫か

探丸  
支考  
已百

白日をりうや

やうても趣き動く胡蝶うき  
衣文えのうきやまの蝶の羽

柳梅  
惟然

蝶のうきあつる蝶うきうきな  
風吹くまののうきあつる  
さうあつるまのうきあつる

周指  
まの  
香窓

春ニ鹿

鹿をりやうき野の鹿の角

沢雅

春ニ耕

あつるれりうきあつるまの  
苗れやうきあつるまの  
千刈り田をかへたうきあつる

木之  
はる  
一葉

柳 附桂



白柳のちりくもさあはれ色  
今柳をまゝとて整ふ柳のそえ  
伽見りも草花の上の露のそえ  
梅さくら中をさるるまね柳の花  
花さくら柳や奇花女の腸躍  
具角

江東のちりく祖父の懐四のほろに  
たつゝ経文のちりくをみれば  
の光明とてふ事哉

小服綿よ光をさやとぬる玉匠  
穂を折る春を花咲梅の柳  
角上  
防番

取砂もくさるや梅のちりく  
ちりく梅のちりくもさるる  
類を 防脚踏藤  
野木  
野波

山吹や地平千ある義一  
田家ものちりく  
園指

山吹もさるるふれ解なまね  
堀のちりくもさるる梅のちりく  
ササ木や穂をまゝとて花のそえ  
酒堂  
雪芝  
荊口

山乃端をちりくもさるる  
春日  
魯町







あきふく川さなわらふや地け糸  
春のりやさあのかれ中乃小室  
こは乃狸ふあふら申まの池  
川多代中ふ文やや田鯉より

均水  
正秀  
仙化  
支辰

二月

胸おも白濁きりて名跡うね

支考

第且

美あやふいふらふまき水  
さあふらふのすもれふあふ  
さあや新あふての黒くさ

武仙  
百蔵  
尚白

あきふのりふらふいきし鯉の貝  
あまのぬきふらふしやまを始

圃菫  
山峰

あきふのりふらふいきし鯉の貝  
あまのぬきふらふしやまを始

えりやぬふらふ衣乃ふらふ表  
ふもらぬあふ後のふらふ梅  
あきふのりふらふいきし鯉の貝  
あまのぬきふらふしやまを始

千川  
芭蕉  
其角  
泉雪  
去来  
土芳



く川まやうくはてさるす須佐

爪隠

なまきとまじけし

えりのやうく片なるれ梅の花

後雖

子けゝあしす川物けやあまき

葛下

背きうあふあをんをるや花の玉

卵を

遠来のものに入ら包元の鯛のそり

耕者

鯛の煮賣のものあそをくゆりか

た初

く川まやう年を若枝の島丘元

前川

枇杷のまふのなもとほくゆりか

斜嶺

清いろや大からけのゆ日新

任行

甘の業やゆきあれも若夷

山蜂

えりやあやうくろなり猫のふ器

竹戸

物宿きうくよ境すよりう

是系

鴈あや餡よやうくくそろり

沾圃

虫やうのそれりよ似うきさ

圃角

反く部

郭公

曉乃電をいそめやあうあに

其角



時多き事や湖水のさう、濁  
 ちう、流や何をもも陰に郭公  
 蜀魄啼ぬおろろ——  
 吟流乃おろろや陽をちふ時  
 燕乃居なり——むろろや  
 泣ろろも勢回となけし子親  
 けりおろろの聲をそれのうろろと  
 郭公かさみの声や中やとり  
 木 附草花  
 橙や日よろめろろるるあろろ  
 園指

雲——北安ろろぬあつあろろ  
 園中二句  
 け中乃在木ろろのこ柿乃花  
 年印乃花木も柿の若葉か  
 姫百合やろろろさあろる鉢の糸  
 題山家く百合  
 ちろろろや地根を流る百合花  
 山ろろろのろろろろろろろろろ  
 冷けろろろろろろろろろろろ  
 手ろろろろろろろろろろろろろ  
 北名 宇都  
 支考  
 尼歌  
 沾圃  
 子川  
 糸龍  
 思和  
 野秋



麦苗や若ふり花をえへ咲

松俵

を我屋の正真

きうあや日えくらもれとも花を

沼圃

夕影や酔てうあめん窓の元

芭蕉

夕影や酔てあきて夜半を

夫  
気南

藤の花とちこみさき入に計

砂香

薔のそらに花うく水つ溜りけ

けあ

蓮の葉あやうきもなち水離れ

白雪

客ある——其より蓮の根あらん

良品

凡

朝をあけうき水離れ凡のふ

芭蕉

娘のうや神へ入るもをうき

至晴

あそん

夕暮れなる。藤をゆきふぬ牡丹外

風弦

早苗

京入や多羽代田植のゆも中

七  
芥

早乙女も花んてやんきさめ

周指

ゆきさめ花あはれさる早苗は

魚目

田植をすそなり顔の恨ひあ

重外

一田植かりあつてやあつる

少枝



里の子の蕪梅の可憐な花

支考

蕪

鈴を鳴らす情をささぐりあふか  
こり月よまれば螢の光を照らす

詩云  
野林

細涼

涼くさや竹揺りけり花はさ  
き草花や清葉にむく夕涼

半殘  
惟然

深川乃清き水

ちや秋の風をささぐりけり涼  
涼くさや加鳥の歌を聴く

史邦  
金翠

るがや表の山に夕涼  
涼くさや牛の乳を飲む川の中

七考  
牡丹  
百年

漫真三句

腰ふけて中に涼くささ  
涼くさや涼くささ  
生輝を映らす夕涼

酒堂  
支考  
雪之

るがや表の山に夕涼

涼風もささぐりけり花はさ  
そがや中を揺らす涼くさ  
まはくささや涼くさ

游刀  
全  
志来



黙然よこする涼や石乃と  
正秀  
獄人乃帷よこすたすし  
土芳  
すしやこいぬ獄の風あふ  
我眉  
あやむいふるまき月さす  
黒圃

巻二反

かこころ思ひこまりぬの隅  
野林  
李成るる世のちろく  
る中  
数驚きり心あやまれしよそへ  
正秀  
実りもさる後ては海老の思ふ  
乙刻  
一服昔の肉のあつさや  
梓はうん

標さるる日あきなりし  
怒風  
茨やふ地もろろぬ思ふ  
素沈  
茅の戸や思ふ白にまう  
我筆  
はろりやこいぬをうろ  
下首  
後あけてはさうやま  
早雲  
粧なる飽もあつさう  
黒東  
まふれをさるるちやの思ふ  
沾圃

朱りな

苟に思ふる岸の思ふ  
可誠  
若牛や細の心川る  
曲翠



五月雨 附々々

白鷺やまきくもなほの微の中  
さうたのや蟹かふ葉の烟  
お月あや路ふくぬ磯の云  
夕まよふ一合をうり日 傘  
夕まよふちりしけある竹の波  
白面や蓮の葉ふく池の茅  
中あまれ今かゝる家やまへ所

蝉

白面や中あまれして柳の影

正秀

石玉<sup>お玉</sup> 芭蕉 沾圃 拙依 曉馬 苔蘇 圃水

さうとあて啼てあうる蝉のよ  
あまの蝉涼しき影やあつふ影  
蝉啼やぬ乃激る窓の聲時分  
うりね

お乃月や潮ふくくうの鑑

難妻

豆二床しき子の動きやむ團を  
虫の喰ふる草やむや寺の烟  
なま寝もぬふの乃中れあふく

胡故 乙列 曉馬 葉拾

杉風 荊口 聖真



川指りつゝ

ふく雉や麦かくくをて柳鏡

文鳥

異草にあうちふや園のはな

葛衣

夕園をりももや酒や

水鷗

あふれもろくに花を  
やうなわ

魚河ある幸も河に流る

馬見

梅さうや籠かゝぬ日

子母

澤深や通る舟もるの

野重

鰯牛はの川を乃そ

水鷗

吾は川流をうや

窓取よるを床の

芭蕉

花こいな帷子

惟然

貧僧しるし

ぬき

細涼をふ

帷子あり袖ふ

支考



終部

名月

んせ成

名月とは藤の旁や田のうしろ

名月の花うしろにて棉畠

うしろを伊賀の山中より名月の  
おろの二つをな——おしてつづれうそ  
うれ、ねあふんと伝へにけるう  
つ——月をすし、根のきこえ  
うれうろりちるるある、交ぬは雨  
う車と園位あ——のあうりやまの  
林原の旁、傍るあうりして平——田

渺くともきこえる老杜、唯雲  
あのもろやういさもろなるある  
——うれ次の棉——をきこえ  
う車——うしろやうろり、うれ  
このむし、うしろはあふん月乃  
あつ——れ、やうなるあふんをうれ  
うち、れ、中にとあふんをうれ  
うれは清香あり、月に花ありて  
是も、うしろのうしろをうしろと  
うしろ、寂實をうしろ、うしろ、風真を  
うしろ——うしろ、うしろ、是非を



とちをいへ

支考評

名月十物より降る田兼子水  
明月や海より流れ八枚玉の月  
そのくせは根をうん月えか  
あつちをうん月えかやせん月の月  
名月やまきの徳を人なりし  
名月やまきの徳を人なりし  
名月やまきの徳を人なりし  
名月やまきの徳を人なりし

中印乃 梨の氣の清く 月こころ  
 名月や 柔れくみよ 白き花  
 明月や 空をえの 形よくもな  
 ちや 氣もな くとふもな  
 明月や 空をぬき ぬきぬき  
 名月や 空をぬき ぬきぬき  
 花の 空をぬき ぬきぬき  
 明月に かりき かりき

配力  
 花柳  
 圃水  
 穉  
 風国  
 需笑  
 空反  
 泥芥

伊勢の山ありてかまは  
虎と号するに



二つとて後此の川ぬる月えか  
芥子芥し細まてりや月えか  
柿のなれし仲とたつ月えか  
いふれちんともやあめやまの月  
名月や里のめぬののまきや  
瑞に飛て月えなうや延接  
明あや到すがましれあ中ふ  
明月や何もあらうれねの通  
飛乃客よも試う月えか

支考  
室牙  
如真  
家比  
木枝  
利合  
丹楓  
野萩  
正秀

渡川のちやうど  
目もくらうし

舟月れはあゝふて月えか  
待て月や月に座しやまはし

如孝  
景桃

家よとん女とふまあつて  
お監う細くしてはうけ  
をたしひわて

媛捨を園とれりやまの月  
あめきん月入あやや城のあけ  
きん月すゝあゝぬ梅うけ  
月新や梅のきんや長廊下  
海川の末やわしあや

沾圃  
了竟  
里来  
牧童



芭蕉 全 懷

全  
懷銳

惟然 淳東 東漸 佔圃 乙列

乙列

嘉川

古

柳種  
隨友  
滑子  
馬荒  
烏梁  
支派

支源



百合をばまき花を結ぶ命うか  
ゆり姫のなまきりも麻一はあまの  
花のうらもふをねくくや鶺鴒花  
鶺鴒のうらまのうらまをまき  
鶺鴒の散るまのうらまのうらま  
折くや雨戸まきまき花のうら  
まのうらまのうらまのうらま  
山人のまきまきまきまきまき  
花のうらまのうらまのうらま  
花のうらまのうらまのうらま

鶺鴒花

風麦 史邦 万平 芭蕉 至境 雪芝 荷香 柳妖 柳下

鶺鴒のまきまきまきまき  
まきまきまきまきまき  
まきまきまきまきまき  
まきまきまきまきまき  
まきまきまきまきまき  
まきまきまきまきまき  
まきまきまきまきまき  
まきまきまきまきまき

鶺鴒花

鶺鴒のまきまきまきまき  
まきまきまきまきまき  
まきまきまきまきまき  
まきまきまきまきまき  
まきまきまきまきまき  
まきまきまきまきまき  
まきまきまきまきまき  
まきまきまきまきまき

可南 小枝 正夷 水鷗 牡丹



鱈鮫やうへ味わね羊の先  
鮎鮎や。時をいやすふと  
蓮の宮るはねさうへん鯉の宮  
ぬけうまなひて死る秋の蟬  
房うへに申く浦の良辰  
鶺鴒やまゝ矢うへ白川  
西果の梅もえりる時や鶺鴒  
老のふの百もあつて早雀

梅風

秋の節や二番たここれ梅も時

梅丸 葛葉 示峯 木十 三光 氷固 支考 芭蕉 游刀

雀みりけきもまをや秋の節  
何れうまかめうへ秋の風  
ねのふやゆきも似れ秋の別  
をのつうへ羊のふもあふ  
ぬんうまや雪ふにむふうへ  
ちねうてまき梅の雪ふうへ

梅妻

獨りてる守ふのせに 梅の庭  
梅妻やまゝあつるはり  
明るのや梅の庭あつるの端

式之 支考 風国 圃無 九多の 猿鉤 一東 宗此 士芳



以形つものや園のふりま位の刻

芭蕉

木實 附蒲

園のふりまのて花のふりまのて

有月

炭焼の法柿にのみを授うち

玄虎

秋草や日わりのみ柿のふり

酒堂

はぬくも常をもも柿のふり

金翠

もり草のて花のふりまのて

沼圃

仙雲山牛の阿婆の字を讀むて

根草の形よりちりまのふり

惟然

もり草のて花のふりまのて

芭蕉

楓

後日北風よりそれよりおる系

小親

麻

庭すゝめにおりて麻や風のそ

凡睡

て麻のふりまのて花のふり

一郎

農業

起しを人より送りて花のふり

車扇

木乃ちに花をむくふ種をうけ

買山

さほけりて花のふりまのて

加吉

花のふりまのて花のふり



昔もあつたやうなうたふし山路に  
早稲刈てあつたやうな山路に  
山道のほろやうなうたふし山路に  
あつたやうなうたふし山路に  
一ふたのやうなうたふし山路に  
肌をうたふし山路に  
百なりといふやうなうたふし山路に  
大阿弥宗子あつたやうなうたふし山路に  
いふやうなうたふし山路に  
そのほろやうなうたふし山路に

芭蕉 乃都 斗延 支考 全 惟然 木石 沾圃

氣

萬年二百十日も恙な  
あややなを白菊の玉牡丹  
者あややなを白菊の玉牡丹

萬年

潤子

支考

題五屏

さうさうやうなうたふし山路に  
さうさうやうなうたふし山路に

兀峯

支考

暮秋

廣河やあやなを白菊の玉牡丹  
以秋とあやなを白菊の玉牡丹

野水

乙列



引秋やも代あけしるあまのつ

芭蕉

雑詠

あちや海老にふしと般ひる  
あちやれ少歌作らん 柿の中  
あちやれ珠玉ちうつれおをふ  
あちや飯やちふしむる 秋の雨  
あちやいふあふのちあふと朝い  
あちやちや稲く家のまど  
あちやふの院味味あふん 庭  
あちや馬に骨骨やも

之通 国友 畦止 早友 萩子 百年 宗波

の節歌をうまて能ふる

あちや書てあまの巻り  
あちやあふのあふり  
あちやふれなもふれあふ  
あちやんやかた 骨骨と枕  
あちや路よあふり  
あちやあふのあふり

稲つあやちのやちあ

稲乃穂

あちや



多き部

時多 附露

此以乃垣の落目やも川時多  
そこれ新を又折風乃只をうけ  
りふりうりも年よれ初時多  
一時をすうり川をうり目影  
幼しこれ小端の草の葉加減  
中押よるふ回るもる時多

野彼 少枝 芭蕉 露沾 馬寛 野明

采童や以てふこれの葉廻り  
梳童もめさ方等のも川をこれ  
穴焦乃めてハリ込をこれうけ  
よりぬや後うりも一これ  
石よきて香霧をぬらん時多  
柿色むり初も色うりむり時多  
多きうりけん里をこれ時多

富指 空牙 有存 鶯口 野萩 高川 里圃

津やもそそぐの宜しきまの  
日影よまじやを雨ふたりり終

津ぬ乃乾日なりぬ時多

泊圃



くわあやわのまうく 凡の跡  
いふくまや一葉くれく鈴の響

小綴  
支考

元禄辛酉の秋を九日

来ふ堂へ菊園へ遊

まほしき宴を秋の月のりかひす  
けはるまきそのはを花いさめ  
もやの菊むあつる時刻まほし  
つふちるまよふくはを展まほし  
白くくはるまきけしむあつるまき  
秋菊の跡くそくくをすめ  
れりるまきくはるまき

芭蕉

菊の香や庭なやむ 履の底  
杜の香や庭なやむ 菊の香  
菊の香や庭なやむ 菊の香  
ハ専らあやめつる菊の香  
何となくのさしにあらん菊の枝  
菊の香も園をににににに

其角  
極作  
詠圃  
菊言  
馬寛

某某の徳士せしむるを  
さあつるに菊も菊の香を  
さあつるに菊も菊の香を  
さあつるに菊も菊の香を  
さあつるに菊も菊の香を



家々菊河をて契なりうけ  
たるにあふんとて人見竹洞  
を人まふをて送るれうけ  
是秋夕より是秋夕なりて  
あるを割たふきに聴くあるを  
風よふと色あるをて

来堂

うゝ—をぬきやぬき菊の友

草

水仙や疎疎りけり日北遠る

曲翠

なや清く雪や葉から北の他花

氷固

水仙の花のこたけや花や—き

惟然

范秀蟬う趙南入ちる花

山家集の歌—習ふ

一二花もふるうぬき雪の氷う車

芭蕉

山家集の歌—完くゆり花

車扁

あや梅のきりりぬきや鳥の影

土女刀

山家集の歌—やうに花枝

花枝

木葉集の歌—枯

あや梅のきりりぬきや鳥の影

花枝

山家集の歌—やうに花枝

花枝



冬川の木の葉をまききりて  
林間の足さくしうれ木の葉をか

惟然  
松風

春柳の葉はくちをさくしうれ

一道

もつるもくちをさくしうれ  
枯るもくちをさくしうれ  
牛の川邊をさくしうれ  
もつるもくちをさくしうれ  
草花の葉はくちをさくしうれ  
賢くもつるもくちをさくしうれ  
あつるもくちをさくしうれ

柳酔  
乃龍  
利平  
支考  
智月

風や背中 吹く牛の角  
あつる川田の畦 乃れ秋気水  
こつるもくちをさくしうれ

風介  
惟然  
鹿生

更講

あつるもくちをさくしうれ  
あつるもくちをさくしうれ

芭蕉  
利名

鳥 附い

乃れこれ海をさくしうれ

塵瀆よりくちをさくしうれ  
追うけてさくしうれ

白空  
蒼翠



小松子も唐申清乃無屋形  
 入梅や後の山全に啼子鳥  
 翫にほろろとぬくー鴨乃足  
 今鴨も太遠うろろくか  
 羽計より入る生は氣か  
 うろも梅は交るなまのか  
 尺へ遠やふ持ひぬのう水  
 一城より白泉やまのう  
 かくゆつや肺をうろて降敷  
 杜ま魚を河豚のちきり水に流し  
 幾の川よりあるうをなり

出竹  
 窓指  
 芭蕉  
 乍木  
 利毫  
 車扁  
 窓水  
 杉風  
 杜作

夕月 附食

冷きものや所賣ありくその月  
 あゝ猶乃わけあり軒やそ月  
 何事もふさるるやう紙のす垢  
 ありや門をあらはにの月

里圃  
 小糸  
 小春  
 支考

埋火

埋火やぬきまそ客の乳あし  
 俵ーさるおをぬくる中庭か  
 自由うや月を追りむち燈

芭蕉  
 柳光  
 洞水

雪



しらや門より橋あり夕る暮  
朝うらや月さるる酒の味  
雪まね心乃くもるもさうね  
鯨鰐ふあそとさひるうもあを  
雪也やと人あそねのたて  
ゆらふもま鞋をあらやりの音  
片羽や音傳りるすく、儀  
里も心のさるや日枝のあ、後  
あな利を降ある音、はらのけ  
伊賀大いさなる山や雪北花

其角 全 夕菊 祐甫 支考 團吟 おや 陽和 配力

神樂

お節あふり歯も喰ふのねさる  
所さる

史邦

食時やうらふるの神お  
神叩千種まをすめり  
踊入り門もさる、汗あそ  
狼をさる、さる、新ねあ

蝶拂 跡餅つこ

蝶さるや花追は、黄拂の中  
蝶さるやあそる、かある、さる

陽香 黄逸

路弟 曼見 許六 治圃



たそふな懐のかゝや 標んや  
標掃やりもふくや 標ちん  
標掃やりもふくや 標ちん  
標掃やりもふくや 標ちん  
標掃やりもふくや 標ちん  
標掃やりもふくや 標ちん  
標掃やりもふくや 標ちん

馬見  
圓如  
惟然  
他水  
風雲  
馬佛

歳暮

うめうめいふ通も けさの市のさ海  
門あやもふくや けさの市のさ海  
うめうめいふ通も けさの市のさ海  
うめうめいふ通も けさの市のさ海  
うめうめいふ通も けさの市のさ海  
うめうめいふ通も けさの市のさ海  
うめうめいふ通も けさの市のさ海

草士  
墨東  
草士

標もあふくや けさの市のさ海  
標もあふくや けさの市のさ海  
標もあふくや けさの市のさ海  
標もあふくや けさの市のさ海  
標もあふくや けさの市のさ海  
標もあふくや けさの市のさ海  
標もあふくや けさの市のさ海

東来  
万平  
中由  
其角  
正秀  
茂子  
猿雞  
惟然

けさの圖なる羽衣もふくや  
けさの圖なる羽衣もふくや  
けさの圖なる羽衣もふくや  
けさの圖なる羽衣もふくや  
けさの圖なる羽衣もふくや  
けさの圖なる羽衣もふくや  
けさの圖なる羽衣もふくや



72

芭蕉 支考 支方 尚白 桃溪 山峰 利合

利令

鄧願 玉芳 雲下 仙杖 高芝 圃仙 二谷 沾圃 杉風



教部

附追善哀牒

涅槃

涅槃像あり、善具も同くあり  
秘くん金や、皺手合る瑞妙き音  
山寺や、横守るに石の涅槃像  
貧窮福乃やありとてしるや、ねん像

沽園 芭蕉 不撒 山峰

貧窮乃由心也

山  
峰

淨佛

灌佛や清くあつめる井戸のや緑  
散るや佛くまゐりて二三日

曲翠  
而玉

散るや佛くもして二三日

灌佛や釈迦と提婆を徒とす

之道

畜鬼祭

念物もな水うさー魂あつ  
 血屋のからやうき魂糸  
 やあやうき魂糸

范雲  
去來  
沾園

困成乃反ち陣よ侍をふかしの  
もとより消息やこれれき旧  
里よ海へてとるをふか  
なむとそ

なほ

家定之な枝よふぢやれ暮糸

芭蕉

悼少年句



うけしきや麻木の若もを那あゝ  
その執とろくぬるのみそ秋の風  
支考 惟然

うけしきと龍口まふ新と  
菊のたれそ綿毒のまゐるの時  
木高 支梁

袖も柿もおうあれうらう山新穢  
沾圃

臘八  
勝をさうてんふそ油豆汁  
許云  
何のりれぬのあまきりふそ大原穢  
如行

雜題  
治末の真如堂にて  
善光寺如來圓帳の時

涼しくも雪しきうらう名佛うけ  
智月  
あまきりふそ二平きりふた記  
乙列  
りー初や敷る川あうて佛五世  
主梁  
そのしきり川就向ふや富士詣  
野坡  
るあまきりふのろ源へる念佛  
支考  
食堂に雀啼なり夕時雨



旅く部

送別

元禄七年の夏に在りて旅の  
をえん送るに

若しに旅に在るに

ふもや啼泣なるに

許さるる旅に

旅人れりるに

留別

旅の惟然とて

旅の惟然とて

旅の子れりるに

甲斐のこの旅に

年よりて旅に

旅の惟然とて

旅の惟然とて

旅の惟然とて

旅の惟然とて

旅人

旅人

旅人

旅人

旅人

旅人

旅人

旅人



るれうとを言ひなりけりし小ね様  
十国も小ね様なりぬ秋の風  
大なる藤原にも藤原の御家  
全 許六

る高野様

るるしゆも余りなりぬ藤原の藤  
はるるを言ひてある小ね様  
明和のを言ひてある小ね様  
おきり言ひてある小ね様  
史邦 我峯 藤原 曾良

圓国の言ひも漸く伊勢の  
るめいさりて

文彦を此扇ひけり新様  
秋の藤原の言ひも漸く伊勢の  
史邦 我峯 藤原 曾良

常陸の國なりある小ね様  
新なり言ひてある小ね様  
おきり言ひてある小ね様  
としてある小ね様  
一板割時の軒の下にありて

標よりある言ひや物なり小ね様  
る川なりある言ひや物なり小ね様  
全 文彦

元禄三年の冬ある言ひや物なり小ね様



しう武仁よおむくしうて  
治田の驛塚をう家にひきうて

宿かりも名残あれゝある  
ふれゝ那

續猿蓑を芭蕉翁乃一流りすゝ  
何人の撰しゝるをきゝる翁述代乃  
後伊賀と野翁乃兄おんあふゝ  
此許にあゝるをきゝる翁述代乃  
御ふゝ本のまがすをきゝる翁  
世小房むゝるをきゝる翁  
書中戒いきけゝあゝいゝすゝ  
此めはゝくはゝるはゝるはゝるはゝる



勿く一字とくす一引とあらねん  
すしえ乃書とくねとく西  
極ひとくはゆ

え縁土京

七月吉日

ぬるな

在云字下

千時と保し来秋八月写

茶海









